

「学士課程におけるジョイント・ディグリー・プログラム等の  
国際連携による学位プログラムの質向上と高大連携の促進」

キックオフイベント(第2回)

# グローバルな学びを支える アカデミックアドバイジング

2022年1月26日

学校法人立命館常務理事／グローバル教養学部教授

山下範久

## 講演者の背景

### 山下 範久

東京大学教養学部教養学科第三(国際関係論分科)  
ニューヨーク州立大学ビンガムトン校(MA in Sociology)  
東京大学大学院総合文化研究科(相関社会科学専攻)

- 2001 - 2007 北海道大学大学院文学研究科助教授
- 2007 - 2010 立命館大学国際関係学部准教授
- 2010 - 2019 立命館大学国際関係学部教授
- 2019 - 立命館大学グローバル教養学部教授
- 2015 - 2016 教学部副部長(大学院、FD、IR担当)
- 2016 - 2018 総合企画室副室長／グローバル教養学部設置準備室副事務局長(教学設計担当)
- 2020 - 学校法人立命館常務理事(企画担当)

学部全体が海外の特定の一校(Australian National University)とのダブルディグリーで設計された日本で初めての学部の教学設計に携わり、その後法人全体のグローバル化政策の企画立案に参加する立場からお話いたします。

## 目次

- 1 アカデミックアドバイジングの必要性の高まり
- 2 そもそもアカデミックアドバイジングとは
- 3 高等教育の国際化の文脈におけるアカデミックアドバイジング
- 4 立命館大学の実践から -国際関係学部国際連携学科-
- 5 立命館大学の実践から -グローバル教養学部-
- 6 Diversity and Inclusionの推進

## 1 アカデミックアドバイジングの必要性の高まり

- 大学のユニバーサル化（エリート→大衆→全入）  
→より多様な背景・条件をもった学生
  - ファースト・ジェネレーション
  - 準備やモチベーションの不足
  - 特別な支援を必要とする学生
  - 社会人学生
  - 国際学生
- 制度化の進行
  - 要支援学生を抽出した介入
  - アカデミックアドバイジングセンターの設置(ex. ICU)
  - アカデミックアドバイジング専門職員の配置(ex. 金沢大)

## 2

# そもそもアカデミックアドバイジングとは？

- 学生支援(広義の学習支援)の一部、修学支援の一部
- 正課内・学位取得のためのサポート(履修計画支援)  
カリキュラム(およびその前提となる諸規則)の枠組みのなかで、それぞれの学生に対して、入口から出口に至るルートを選択肢をできるだけ多く提供すること  
⇒ retentionの確保 と学びの目的/student successの実現へ
- 学生とアドバイザーとの協働的な過程  
学生の自己発見と自己決定の支援
- 学生からみた主な機能
  - 必要な情報(履修規則、各種手続き、カリキュラム構造・卒業要件等)を得る
  - キャンパス内の施設や関連部署についての理解を得る
  - 自分自身の目的(専攻や進路)を決定する
  - 目的達成のための計画を自ら立てる

04

## 3

# 高等教育の国際化の文脈におけるアカデミックアドバイジング

- ニーズの本質はどこでも同じ  
入口・出口双方の多様化と学びの能動化 → 学びの方向感覚をいかに支えるか
  - 教職協働のかたちのちがい
    - 教員と専任アドバイザー(職員)の協働 → 協働のかたちは様々(二重型、分担型、総合受付型...)
    - 教員中心の伝統と専門的職員の層の薄さ
  - アドバイジングの文化のちがい
    - アドバイジングに対する学生の期待や信頼  
→ 学生とアドバイザーの協働のための目標共有  
→ アドバイジング・シラバスで学生アドバイザー双方の責任を明文化
- 連携の重要性**
- 「国際学生」(受入れ/送出し)にとっての学修以前の困りごとの多さ
  - 提携校との制度のすり合わせ
- ※アカデミックアドバイジングそのものが協働(learner/advisor; faculty/administrator)的であると同時に、修学支援の体系のなか、さらに広く学生支援の体系のなかで機能する必要

05

# 4

## 立命館大学の実践から - 国際関係学部国際連携学科- (1)

### ● アメリカン大学とのあいだのジョイントディグリープログラム (2018年設置)

- RU・AUのそれぞれで二年間学ぶカリキュラム
- 学士「グローバル国際関係学」/ BA in Global International Relations
- 入学定員:25名 … RU Home Students:10, AU Home Students:15 (実績ベースの内訳)

立命館大学 HOME	1年目		2年目		3年目		4年目	
	Spring 1	Fall 2	Spring 3	Fall 4	Spring 5	Fall 6	Spring 7	Fall 8
	立命館大学	立命館大学	立命館大学	アメリカン大学	アメリカン大学	アメリカン大学	アメリカン大学	立命館大学
	Core/Foundation/Cohort Courses				Instruction linked to Seminars and Senior Capstone Program		Senior Capstone Program (Seminar)	
	Academic Skills (Building Foundations of Academic Writing)		Research Methods					
	Japanese/English (if necessary)		Thematic and Regional Courses					

American University HOME	1年目		2年目		3年目		4年目	
	Fall 1	Spring 2	Fall 3	Spring 4	Fall 5	Spring 6	Fall 7	Spring 8
	アメリカン大学	アメリカン大学	立命館大学	立命館大学	立命館大学	立命館大学	アメリカン大学	アメリカン大学
			Research Methods, Seminars		Instruction linked to Seminars and Senior Capstone Program		Senior Capstone Program	
	Core/Foundation/Cohort Courses							
	Japanese		Thematic and Regional Courses					

## 立命館大学の実践から - 国際関係学部国際連携学科- (2)

- RUで2年、AUで2年学ぶカリキュラム。両大学の履修システムやルール、学年歴などが大きく異なる点や、各大学でしか履修できない科目を2年の在学中に確実に履修していく必要があるため、**両大学のスタッフが連携したアドバイジングが非常に重要。**
- **各学生に担当のアカデミック・アドバイザーを配置し、**  
セメスターに1回もしくは2回、1対1でのアドバイジング(面談)を実施
- 当初アドバイザーとして助教(任期制)を配置したが、継続性の観点から専任教員も含むチーム制に再編成。**事務室の職員も加わった協働体制に**
- **教員アドバイザーは、授業の受講や成績、英語能力向上などの学修面やキャリアに関するアドバイスを**中心にサポート。
- **職員は**個々の学生の**成績・受講希望科目の確認、受講登録のサポート**を実施。  
健康管理、寮関係、キャリア支援、学費・奨学金、渡航準備の支援といった案件についても**学内専門部署と連携しながら**学生をサポート。

## 立命館大学の実践から - 国際関係学部国際連携学科- (3)

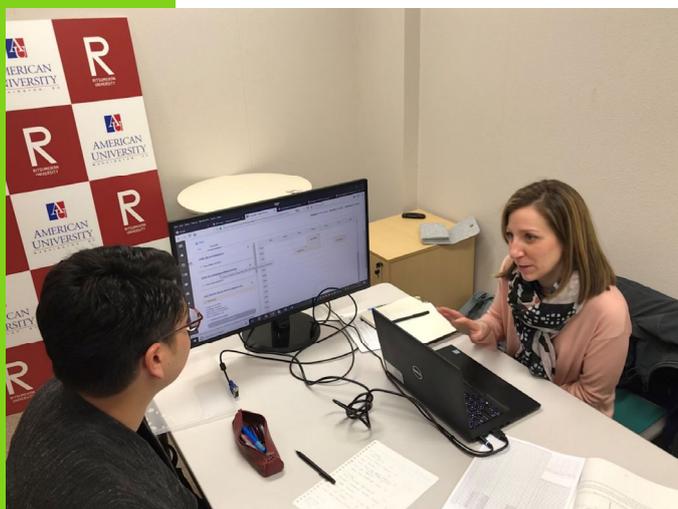
- RU・AU両大学のアドバイザー間で個々の学生の状況の共有  
(各学期履修登録・成績確定のタイミングで定期的に共有+週ベースの日常的共有)
- 緊密に連携したアドバイジング
  - AUアドバイザーによる、AU渡航前のグループ・アドバイジング
  - AU-RUアドバイザー間の引継ぎミーティング  
→ 学生が抱える問題やカリキュラム上の問題を共有、アドバイジング方針のすり合わせ
  - 両大学による入学時オリエンテーション
  - 各学生のアドバイジングの記録(アドバイジング・ヒストリー・シート)をAU・RUで共有

### アドバイジング体制

RU: 教員5人+職員3人のアドバイジングチーム

AU: 専門職アドバイザー1人

## 立命館大学の実践から - 国際関係学部国際連携学科- (4)



## 立命館大学の実践から - 国際関係学部国際連携学科 - (5)

### RUにおけるアドバイジング制度の強み

#### 「教職協働」に基づくアドバイジング制度

- 系統だったアドバイジング制度
- 人的異動にも対応可能

#### 職員の役割

- アドバイジング・ガイドラインの準備
- 履修登録の詳細の確認
- イレギュラーへの対応

#### RUにおけるアドバイザー

- 教員の視点から学生を見つめ、プログラムの整備にも有意義

### 今後の課題

#### 増加する学生

- 学生が増加していく中でいかにアドバイジングの質を担保するか？
- ※ 最大50人の学生がRUでのアドバイジングの対象に

## 5 立命館大学の実践から - グローバル教養学部 - (1)

- オーストラリア国立大学 (ANU) Coral Bell Schoolとのあいだのデュアルディグリープログラム (2019年設置)

- RUから学士「グローバル教養学」/ ANUからBA in Pacific Affairs
- 入学定員: 100名 ... Cohort A (RU Home): 90名, Cohort B (ANU Home): 10名
- Cohort A学生は3年間で学ぶが、うち2年はRUの授業とANUの授業を並行して学ぶ

4月入学  
Cohort A

Year 1		Year 2		Year 3		Year 4	
Semester 1	Semester 2	Semester 3	Semester 4	Semester 5	Semester 6	Semester 7	Semester 8
RU Courses		RU+ANU Courses		ANU Courses		RU+ANU Courses	

9月入学  
Cohort A

Year 1		Year 2		Year 3		Year 4	
Semester 1	Semester 2	Semester 3	Semester 4	Semester 5	Semester 6	Semester 7	Semester 8
RU Courses		RU+ANU Courses	ANU Courses		RU+ANU Courses		

## 立命館大学の実践から -グローバル教養学部- (2)

### アカデミックアドバイジング

● 学部内にアカデミックアドバイジングセンターを設置(学内初)

- 当初教員主体の運営でアドバイザーとして助教を配置したが、アドバイジング専門職として米国大学での実務経験を持つ職員をディレクターとして訓練を受けた複数職員による運営に切り替え(教学担当副学部長と連携)
- 他方で、初年次向けのWelcome Faculty Mentoringと卒業研究プロジェクト向けのResearch Mentoringを制度化
- ANUとの連携・・・Joint Management Committee (セメスター毎)で教学担当副学部長レベルでの情報共有
- “Academic/English Hurdle”制度への対応
- セメスター第6～8週で中間成績評価を全科目で実施。最終成績確定前にリスク学生を洗い出しアドバイザーによる「先取り支援」を実現
- “Academic Warning”  
前セメスターのGPAが2.5未満の学生は履修登録前にアドバイジングを必須化。  
Warning対象学生は面談が終了するまで次セメスターの受講登録を認めないことで制度に実効性を持たせる。
- Academic Advising Databaseの実装・・・すべてのアドバイジング履歴の蓄積と「見える化」

12

## 立命館大学の実践から -グローバル教養学部- (3)

### アカデミックアドバイジングチームからのコメント

- 10人の学生がいれば10人の目標や困りごとがある。従来のように学生を「日本人学生」「留学生」「〇回生」のような属性や集団ではなく、あくまでも個として捉えることの大切さを改めて認識している。学生は学生として捉えるべきであって、日本人や留学生といった属性に意味はないと感じるようになった。
- 最初はアカデミック・アドバイジング＝履修指導と  
思っていたがそれだけではない。学生の目標達成支援のために、正課内外でどれだけ多くの選択肢を提示できるかが重要。  
そのために学内の諸制度も理解しておく必要がある。もちろん卒業・学位取得という最終ゴールは重要なので、卒業要件の正確な理解は必須。



“That’s Why GLA —College of Global Liberal Arts, Ritsumeikan University—”【動画ファイル】より引用

13

## 立命館大学の実践から -グローバル教養学部- (4)

- 卒業要件や教学ルールを正確に理解していることを大前提として、それだけでは務まらない仕事だと思っている。特別な支援ニーズを持つ学生の特性や学生の学習理論、積極的傾聴などの知識・スキルがないと効果的なアドバイジングはできないし、カリキュラムを俯瞰する力や教員の専門領域を把握・理解することも必要。学ぶことが多く面白いが、一方でプレッシャーも感じる。
- アカデミック・アドバイザーだけでは当然学生を支え切れない。包括的に学生を見守り伴走するためには他の支援担当部署との高度な連携が必須で、学内ネットワーキングも重要視している。他の支援担当部署から専門家を招いてアドバイザーのトレーニングをお願いする取り組みもしている。
- 様々な教学諸制度や学部ルールが実情に合わず、学生ファーストではなく大学の事情ファーストになっているということに気づく機会も少なくない。
- グローバルスタンダードにあった教学制度の見直し・豊富化や、学生の自走支援のためのソフトウェア開発など制度とモノの整備や充実も必要。
- アドバイジングに携わるようになって、これまで以上に自分の業務や学部の諸制度が学生に対してTransparent(透明)でAccountable(合理的説明の可否)かどうか強く意識するようになった。「暗黙の了解」は学生には通用しない。

## 6 Diversity and Inclusionの推進

- アカデミックアドバイジングは学び手と学びのゴールの多様化への対応を背景として進化  
→ diversity and inclusionの最前線
- 海外の大学と協働してわかるのは、潜在的な「困りごと」のボリュームの想像以上の大きさ
- アカデミックアドバイジングは、「-」を負った学生を「0」地点に連れてくる支援ではなく、  
すべての学生がよりよく自らのゴールを追求できるようにする支援
- より包摂的な環境であればあるほど、直接的に困っている個々の学生だけでなく、カリキュラム全体や個々の授業全体のパフォーマンスが上がる
- 多様性は大学における学びの基盤的な資源
- JD/DDプログラムは、新しい制度の導入の組織的ハードルが相対的に低い  
→ 意義・効果が理解されれば、全学展開への道が開ける